ることになった。『蓮如上人御一代記聞書』に「蓮如上人、権化ノ再誕トイフコト、ソノ証多シ、前ニコレヲシルセリ。御詠歌ニ『カタミニハ六字ノ御名ヲノコシヲク、ナカランアトノカタミトモナレ』ト候。弥陀ノ化身トシラレ候事歴然タリ」（三〇〇）と尊敬されるに至ったのである。

しかし、今日における蓮如の評価は、毀誉褒貶様々である。破邪顕正・信心為本・王法為本等の教義史上の問題や、人間的な面における諸坊造営（大津顕証寺・山科本願寺・吉崎御坊・石山御堂等幾多の寺坊建立）多妻多子、兵力応用等のことから誇張ともいうべき善悪両面の批評が行われている。しかも、それが同じ本願寺教団の内部で論議されているのは時の流れというべきであろうか。何れにしても『反古裏書』に「或は仏法まれなる遠国にはじめて俗縁をくはへ、法流恢弘の秘計をめぐらす事、昔年よりも是おほし、才御一宗繁栄の根元たるべし」とある如く、今日の東西本願寺は蓮如の力によって存在するといっても過言ではない。その原動力となったものは、偏に蓮如の卓越した説教にあったと私は考える。わが国の説教の歴史を大きく二分すれば、前半は顕密諸宗の唱導説経であり、後半は法然・親鸞によって開かれた浄土教の化他の説教であるが、蓮如以後の説教は、浄土宗の説教師達も技術の面では真宗の説教を学んだのであり、その意味で蓮如が説教の歴史の上に残した業績は極めて大きかったといわねばならない。

をしたという非難は当らない。蓮如は『悪人ノマネヲスベキヨリ、信心決定ノ人ノマネヲセヨ』（三〇二）と説教した。そして、説教を続ける時に、聴聞者が退屈すれば「なににても人のすきたることなど申され、うれしやと存候所に、又仏法の事を仰せられ候」（『実悟旧記』）という方法をとった。『実悟旧記』には「色々御方便候て」とか「能をもせられ、仏法に退屈仕候者の心をくつろげ」とか「御酒をも下され物をもくだされ」とかいう記事が見えるところから、説教の聴き手に対して随分気を使っていることがわかる。また、蓮如は、一日中休みなく働いて疲労しながらも、夜の説教を聴きに集まる人々の労をねぎらうために、門徒の行儀作法には寛容であった。『実悟記拾遺』に「行儀タヾシクシテ、タヾシクナルナラバ、タヾシクシテキクベシ。ソレモタヾシクシテ、キクコト一向ニカナハズバ、ムマレツキノマヽデノチヲマタズ、マヅキクベシ」という蓮如のことばが記されている。

蓮如の説教の成功について、今一つ重要なことは、彼の組織作りの巧妙さである。真宗の説教の社会的基盤は農村において特に強く開拓されたが、蓮如は村を動かす名主や年寄等の顔役と共にまず布教活動を始めたのであった。『栄玄記』に「三人とは坊主と年寄と長と此三人さへ在所々々にして仏法に本付候はゞ、余のすえ〴〵の人はみな法義になり、仏法繁昌であろうずるよ」とある。坊主・年寄・長という村々の顔役をまず門徒の指導者として重視し、提携し、そこから布教活動が開始されたのであり、これも鋭敏な蓮如の社会観察眼によるものとして注意しなければならぬ。かくして坊主・年寄・長を中心にして強力な門徒の組織（講）が出来上っていった。真宗本願寺系の門徒の組織は益々強大となり、教団は愈々拡大発展の途を辿ることとなった。（笠原一男著『蓮如』の巻末に蓮如研究に必要な主要参考文献の紹介がある）この強大な組織の中で、説教者達は大いに活躍し、真宗の僧侶達は安定した生活が保てるようになった。後世この講の組織はレクリェーションの場ともなり、説教の会場（真宗では「御座」と呼ぶ）としても繁栄し、次第に世俗化していったが、御文を中心にした蓮如の説教方式は、この講組織の中で最大の効果をあげることが出来たのである。

真宗の勤行法式の中に芸能的な一こまがある。本願寺教団の勤行は、本山・末寺・門徒を通じて『正信偈』『和讃』『御文』を朗読するのが普通である。この三つは何れも独特の節づけをして朗詠する。殊に「御文」が下りむきに読みあげられると、聴聞者は深く頭を垂れるのがしきたりとなっている。浄土宗の「お十念」に似ている。これは蓮如在世中から行われた長い伝統をもつものであり、近世に盛行した節談説教の一つである「御文説教」を生む重要な法式である。

蓮如は常に聴聞者が何を考え、何を求めているかを知ることから説教を始め、聴衆の心理を十分につかんでいた。これは説教者にとって極めて重要なことである。そして「仏法に退屈仕候者」には「心をくつろげ」、「あしき者」は「たらし候」（『実悟記』）という方法で信心を語る転機を談合の中に見出すのであった。そして、遂に蓮如もまた法然や親鸞と同様に、後世の説教にその一代記を掲げ

タヾ聖人ト直ニ申セバ聊爾ナリ。コノ聖人ト申モ聊爾歟。開山トハ、略シテ申ベキカトノ事ニ候。タヾ開山聖人ト申シテヨク候ト云云（二七四）

真宗の説教では、正統の説教者は必ず「御開山」という。それは蓮如以来の伝統であった。現代法話で屢々耳にする「親鸞は」とか「法然が」とかいう宗祖の呼び捨ては説教（布教・法話・伝道・教導も同様だ）に用いるべきではない。説教は学問ではなく、信を説くものである。蓮如はその点を慎重に考慮し、「開山聖人」と申すべしと教えた。「坊主ハ人ヲサヘ勧化セラレ候ニ、我身ヲ勧化セラレヌハアサマシキコトナリト云云」（二七八）は、現代の布教家も心すべき戒めといわねばなるまい。更に蓮如はいう。「坊主トイフモノハ大罪人ナリト仰ラレ候。其時ミナ〳〵迷惑申サレ候。サテ仰ラレ候。罪ガフカケレバコソ阿弥陀如来ハ御タスケアレト仰ラレ候ト云云」（二八七）と。

前住上人（実如―関山註）仰ラレ候。御門徒衆ヲアシク申事、ユメ〳〵アルマジキナリ。開山ハ御同行御同朋ト御カシヅキ候ニ、聊爾ニ存ズルハクセゴトノ由被仰候（二九三）

開山聖人ノ一大事ノ御客人ト申スハ、御門徒衆ノ事ナリト仰ラレシト云云（二九四）

御門徒衆上洛候ヘバ、前々住上人、仰ラレ候。寒天ニハ御酒等ノカンヲヨクサセラレテ、路次ノサムサヲモ忘ラレ候様ニト仰ラレ候。又炎天ノ時ハ、酒ナドヒヤセト仰ラレ候。御詞ヲ加ラレ候。又御門徒ノ上洛候ヲ、遅ク申入候事クセゴト、仰ラレ候。御門徒ヲマタセ、ヲソク対面スルコト、クセゴトノ由仰ラレ候ト云云（二九五）

右の条々は、蓮如の門徒に対する態度が如何なるものであったかを如実に示している。二九五条に見える門徒の接待についての気のつかい方は並々ではない。このことは『実悟旧記』にも記されているし、『本願寺作法之次第』にも見える。『空善記』には「ひとへに門徒にやしなはるゝなり」とある。説教者の心得として最も肝要なことである。蓮如の説教が蓮如在世当時の庶民層に深く食い込むことが出来たのは、蓮如のこの細かい心遣いによるものであった。

この蓮如の説教の心得は、本願寺を中心とする真宗の説教者達の間で末永く伝承された。「御門徒ノ中ヘ行キタマハヾ、時ノハヤルモノヲ、麦飯、粟飯、ソバノカキモノ、ナミソツナド喰イタイナド申サルベシ、人ニ大ギガラレ、身ヲ重フシナシテ、人ツカイノ所ヘハ行、サナクバユクマジキト思コロナラバ、一人モ立寄ルヽハアルマジク候ナリ」と堅田・本福寺の『本福寺跡書』にあるのは、蓮如の教化態度が強く影響を与えた証拠であろう。理想的な説教の姿は蓮如によって創造されたといってもよい。

蓮如上人、細々御兄弟衆等ニ御足ヲ御見セ候。御ワラヂノ緒クヒ入、キラリト御入候。カヤウニ京田舎御自身ハ御辛労候テ、仏法ヲ仰ヒラカレ候由仰ラレ候シト云云（三〇一）

蓮如は、足にわらじの緒がくい入り、時に大きなわらじまめを作って布教の旅に一生を過してしまった。総て貧民を愛する説教者の心の発露であった。蓮如が自己の生活を確保するために巧言の世渡り

八）

ここにいう通り、まさに蓮如は真宗再興の上人であった。蓮如は御文においても、平常の説教においても決して高遠な理論や煩鎖な思弁を述べることをしなかった。一途に親鸞の精神に従って「後生タスケタマヘ」「弥陀タノメ」と名号の意義を説き続けたのである。後世の説教者たちは、蓮如のこの方法によって「弥陀たのめ」と説いた。その伝承は親鸞を信ずるものにおいてのみ正しかった。「イカニ不信ナリトモ、聴聞ヲ心ニイレマウサバ、御慈悲ニテ候間、信ヲウベキナリ。只仏法ハ聴問ニキハマルコトナリト云云」（一九三）とは聞法の絶対を説いたものである。

世間ノ物語アル座敷ニテハ、結句法義ノコトヲイフ事モアリ、サヤウノ段ハ人ナミタルベシ。心ニハ油断有ベカラズ。アルヒハ講談、又ハ仏法ノ讃嘆ナドイフ時、一向ニ物ヲイハザルコト大ナル違ナリ。仏法讃嘆トアラン時ハ、イカニモ心中ヲノコサズ、アヒタガヒニ信不信ノ義、談合申ベキコト也ト云云（一九六）

説教（右にいう「講談」「讃嘆」は、共に「説教」の異称である）の時には、疑問がある場合はどこまでも追及し、話し合って解決するように努めよと蓮如は教える。

また、蓮如は同行を極めて大切にした。

仏法ノ讃嘆ノトキ、同行ヲカタ〳〵ト申ハ平外也。御方々ト申テヨキ由仰ゴト、云云（二五八）

如何なる人も差別することなく、蓮如は同行を尊重した。留守職時代からの古い本願寺法主のしきたりだった三度の坂東修行を蓮如も実施した。『空善記』に、二度目の下向の旅路で、以前蓮如の説教を喜んだ貧農夫婦を訪ねたエピソードが記されている。「御下向はかたじけなきに、なにを供御にそなえ申すべきか」との夫婦の心配に、蓮如は「なんじらはなにを食するぞ」と聞き、「ひえと申すものばかり」と答えると、それを食べながら説教談合に一夜を徹したという。まずい稗の粥をすすって庶民を友とした蓮如の態度に注目したい。

雨モフリ、又炎天ノ時分ハ、ツトメナガ〳〵シク仕候ハデ、ハヤク仕テ人ヲタヽセ候ガヨク候由仰ラレ候。コレモ御慈悲ニテ人々ヲ御イタハリ候大慈大悲ノ御アハレミニ候」（二六一）

右は蓮如の思慮の程を示す。くどい話はつつしまねばならぬ。蓮如は、長々と説教することをせず、「千の物を百に、百の物を十に、十の物を一に」という心得で親鸞の教義を要約して話すことに力めたと『蓮淳記』や『実悟旧記』に記されている。蓮如の子である蓮淳（兼誉）や実悟（兼俊）にとって父の教訓は身にしみたものと思われる。対機説法は重要な説教の心得である。同じく蓮悟（兼縁）も父蓮如の滅後、幾度も父の説教の夢を見たことが『御一代記聞書』に見えている。

四

嘆徳ノ文ニ親鸞聖人ト申セバソノ恐アル故ニ、祖師聖人トヨミ候、又開山聖人トヨミ申モ、オソレアル子細ニテ御入候ト云云（二七三）

庶民こそ教団の社会的基盤を作る重要な存在であって、これを最も大切にしなければならぬという自覚が蓮如の心の総てを支配していた。

蓮如は、こうした談合によって「聞即信」の意義を説き続けた。そして更に分科会を作って徹底させる方策をとった。また、御文については念を入れて読ませることを怠らず、その効果を見届けることに愈々自己の説教方式の確信を強めるのであった。「蓮如上人御病中ニ、慶聞ニ何ゾ物ヲヨメト仰ラレ候トキ、御文ヲヨミ申スベキカト申サレ候。サラバヨミ申セト仰ラレ候。三通二度ヅヽ六遍ヨマセラレテ仰ラレ候。我ツクリタルモノナレドモ殊勝ナルヨト仰ラレ候」（一二五）とある『蓮如上人御一代記聞書』の中の「三通二度ヅヽ六遍ヨマセラレテ」は、蓮如が知性を排して信仰の立場をとっていることを示す。説教は学問ではない。宗教は理屈ではない。蓮如は優れた知性と教養を持ちながら、説教の特質を見きわめ、出来るだけわかり易く、同じことを繰返し繰返し説く方法をとった。ここに蓮如式説教の大きな特色がある。「ヒトツコトヲ聞テ、イツモメヅラシク初タルヤウニ信ノウヘニハアルベキナリ。タヾ珍シキコトヲキヽタク思フナリ。ヒトツコトヲ幾度聴聞申ストモ、メヅラシクハジメタルヤウニアルベキナリ」（一三〇）「道宗ハ、タヾ一御詞ヲイツモ聴聞申ガ、初タルヤウニ難レ有由申サレ候」（一三一）の二条は優れた説教の在り方をよく教えている。同じことを何度話しても、その度毎に新鮮な感じを与えるような技術を持つことが説教者には必要である。また、聴聞者も赤尾の道宗のように、ただ一つことを幾度聴いても、常にはじめて聴くように有難く受け取るべきであろう。宗教における「信」の世界とは、そういうものでなければなるまい。

蓮如上人仰ラレ候。方便ヲワロシトイフ事ハ有間敷ナリ。方便ヲ以テ真実ヲアラハス廃立ノ義ヨク〳〵シルベシ。弥陀釈迦善知識ノ善巧方便ニヨリテ、真実ノ信ヲバウルコトナル由仰ラレ候ト云云（一七六）

方便は、十波羅蜜の一であり、真実法に対してその法に誘引するために仮に設けられた法門をいう。権仮方便・善巧方便といわれ、仏・菩薩が衆生の機に応ずる方法を用いて化益を施すもの。四種方便・五種方便等様々な分類があるが、最もわかり易くいえば「虚構」ということであろう。説教は優れた虚構を必要とする芸術・文学とは趣を異にする。しかし、説教の譬喩因縁の部分には虚構が必要である。俗に「嘘も方便」という。この言葉は真の方便の意味とはかけ離れて用いられるが、享受者の理解の仕方で真の方便の意味に接近する。虚々実々の説教話法の妙味を蓮如は熟知していた。宗義を語る時、方便をもって真実をあらわす廃立の義を知ってほしいために、蓮如はこの条を慎重に述べたのであろう。

聖人ノ御流ハタノム一念ノ所肝要ナリ。故ニ、タノムトイフコトヲバ代々アソバシヲカレ候ヘドモ、委ク何トタノメトイフコトヲシラザリキ。然バ前々住上人ノ御代ニ御文ヲ御作候テ、「雑行ヲステヽ後生タスケタマヘト、一心ニ弥陀ヲタノメ」トアキラカニシラセラレ候。然バ御再興ノ上人ニテマシマスモノナリ（一八

蓮如上人仰ラレ候。聖教ヨミノ聖教ヨマズアリ、聖教ヨマズノ聖教ヨミアリ。一文字ヲモシラネドモ、人ニ聖教ヲヨマセ聴聞サセテ信ヲトラスルハ、聖教ヨマズノ聖教ヨミナリ。聖教ヲバヨメドモ、真実ニヨミモセズ法義モナキハ、聖教ヨミノ聖教ヨマズナリト仰ラレ候（九四）

「聖教ヨミ」の真意を覚ることは、説教者の重要な心得である。

時節到来トイフコト、用心ヲモシテ其上ニ事ノ出来候ヲ、時節到来トハイフベシ。無用心ニテ出来候ヲ、時節到来トハイハヌコトナリ。聴聞ヲ心ガケテノウヘノ宿善無宿善トモイフ事ナリ。タヾ信心ハキクニキハマル事ナル由仰ノ由候（一〇五）

かつて本願寺派が衰微して、仏光寺・毫摂寺・錦織寺・三門徒・専修寺の諸派の布教が栄えていた時、蓮如は、平生業成の親鸞流を正すことに苦心した。そして勇敢に異端者達の説教を批判したのである。文明六年（一四七四）八月十日付の御文には「抑此方北ノ荘一里五十町ノ間念仏同行ノ坊主達ノ心中ノ風情ヲ、ツク〳〵トコノ当庄ニシヅカニアリテ見及ブニ、マコトニ当流一儀ノ趣ヲウルハシク存知シタル躰ハ、一人モ更ニナキヤウニ思ヒハベリ。コレアサマシキ次第ニアラズヤ云々」とあり、越前を中心にして繁栄した三門徒派その他の坊主達の説教を厳しく、激しく非難して、正しい説教の在り方を説いた。実に蓮如の布教態度は、真宗諸派の本山には例のない傑出したものであった。蓮如は御文という異例の説教方式を創案することによって、異端との戦いにも大きな効果をあげることが出来たのである。

三

前々住上人御法談已後、四五人ノ御兄弟ヘ仰ラレ候。四五人ノ衆寄合談合セヨ。必ズ五人ハ五人ナガラ意巧ニキクモノナル間、能々談合スベキノ由仰ラレ候（一一九）

一席の説教が終ってから、数人が今一度寄り合って談合することは、「聞法」を徹底するためには極めて重要である。入念な蓮如の説教方式を知ることが出来る。『実悟記』に「昔は東山に御座候時より御亭は上段御入候と各物語候。蓮如上人御時上段をさげられ、下段と同物に平座にさせられ候。其故は仏法を御ひろめ御勧化につきては上蔟ふるまひにては成べからず。下主ちかく万民を御誘引あるべきゆへは、いかにも〳〵下主ちかく諸人をちかく召て、御すゝめ有べきとての御事にて候」とあるのは、蓮如の説教の便を考慮しての英断であった。本堂の上下の壇階を除去するということは、相当な決断であり、蓮如が説教に如何に細心の配慮をしたかがよくわかるのである。蓮如は、総ての門徒は親鸞の門徒であると考え、皆々（自分も含めて）同行であり同朋であると誠意をもって人々に接していた。『空善記』には「先住も形儀をも声明をもかたく御をしへ候しかども、田舎の衆にても常住の衆にても対しめされ、平座にて一首の和讃のこゝろをもまた御雑談なんど仰られたることはなし」とあるので、存如の頃までは平座で誰とでも雑談するということはなかったのである。座を同じくして談合することは、参加者が対等の立場で話し合えるので、説教の効果は倍加するものである。

践していた。『実悟旧記』に「堂に於て文を一人なりとも来らん人にもよませてきかせば、有縁の人は信をとるべし、此間おもしろき事を思案し出たる」とある。「おもしろき事」とは、説教における御文の効力の強さを蓮如自ら認めての発言であろう。事実、御文が説教の上で示す力は大きなものがあった。その読み方には独特のイントネーションによる技術が必要であり、蓮如はその点にも工夫を加えていたと思われる。晩年に弟子達が御文を読むのを聴いた蓮如は「おれがしたるものなれども殊勝なり」（『空善記』）といったという。蓮如門下の空善は御文に深い感銘を受けたことを『空善記』に「末世の愚鈍の衆この御詞により信心決定の人数いできたり、その数をしらず、ありがたき御勧化とぞおぼえはべる」と記し、真宗の安心が徹底するようになったことを喜んでいる。

蓮如の御文述作による強烈な説教教化の活動は、文明三年（一四七一）五月に越前吉崎に赴き、吉崎に居を定めて熱心な教化に当る頃が中心であったが、御文は単なるフィーリング説教の道具ではなく、「最聖教となづくべしといへども其憚ありとして文と号せり」（『遺徳記』）というほど聖教として高い価値を有するものである。御文は宗義の民衆化と安心の純化、更には宗門の整一という点でも大きな成果を収めたのである。

私は、その意味とは別に、説教という形式の上で蓮如が御文の読み方に創意を示した点に殊更注目したい。特に『正信偈和讃』の依用は留意しなければならぬ。親鸞の和讃の諷誦は早くから行われていたであろうが、蓮如が『三帖和讃』に『正信偈』を加えて四帖とし、文明五年（一四七三）三月に開版して儀式の中心としたことは、御文の読み方と共に諷誦に重点を置いた宗義の民衆化をはかった蓮如の叡智を示すものである。

御文ハ如来ノ直説ナリト存ズベキノ由ニ候。形ヲミレバ法然、詞ヲ聞バ弥陀ノ直説トイヘリ（一二四）

とあるように、御文は如来の直説として受け取られるべき性質のものであった。『遺徳記』に「釈龍玄に対して何ぞ物を読と仰られける間、御文をよみ申べきやとありしかば、軈て領掌と仰らるる間、御文を読奉る。つくづくと聞召し、嗚呼不思議なる哉や、わが造たる文なりといへども殊勝に覚る間、なを読べしと仰ける。五六遍読誦せさせられ、是実に述して不作なりといへども義に符合せり、最聖教となづくべしといへども其憚ありとて文と号せり。是即卑謙の御詞恐くは先師の撰述とおもう猶疎なり、唯是如来の金言なりと仰崇すべしとなり」とあるのは、蓮如の御文に対する確信を示すものである。御文が本願寺中興の精神的基盤となり得たのは、蓮如の卓越した説教的センスが十分に示されたのも要因である。「御文ハ如来ノ直説ナリ」という態度は

聖人ノ御一流ハ阿弥陀如来ノ御掟ナリ。サレバ御文ニハ「阿弥陀如来ノ仰ラレケルヤウハ」トアソバサレ候（七五）

にもよく現れている。

聴聞ヲ申モ大略我タメトハオモハズ。ヤ、モスレバ法文ノ一ヲモキヽオボエテ人ニウリゴヽロアルトノ仰ゴトニテ候（八二）

これは説教者が心得ねばならぬ戒言である。

いるところにあった。右のような例をあげて説教の心得を蓮如は懇切に教えたのである。聴聞者が「信」を会得しなければ説教は無意味である。

蓮如上人ノ御トキ、コヽロザシノ衆モ御前ニオホク候トキ、コノウチニ信ヲエタルモノイクタリアルベキゾ。一人カ二人カアルベキカナド御掟候トキ、ヲノ〳〵キモヲツブシ候トマウサレサフラフ由ニ候（五〇）

法慶マウサレサフラフ。讃嘆ノトキ、ナニモオナジヤウニキカデ、聴聞ハカドヲキケトマウサレサフラフ。詮アルトコロヲキケトナリ（五一）

聞法して一体どれだけ安心を得たか。「信」を得たか。説教者にとって、信を得たものが聴聞者の中に何人いるのかということは気になるものだ。蓮如はそれを厳しく問い質し、聴聞者の心を引き締める。ここにいう「讃嘆」とは「説教」の異称である。説教の聴き方を蓮如は「カドヲキケ」「詮アルトコロヲキケ」と教えたのである。

「御文」ノコト、聖教ハヨミチガヘモアリ、コヽロエモユカヌトコロモアリ、「御文」ハヨミチガヘモアルマジキトオホセラレサフラフ。御慈悲ノキハマリナリ。コレヲキヽナガラコヽロエノユカヌハ無宿善ノ機ナリ（五三）

「御文」ハコレ凡夫往生ノ鏡ナリ。御文ノウヘニ法門アルベキヤウニ思フ人アリ、大ナル誤ナリト云云（一七七）

蓮如は『教行信証』や『六要鈔』を表紙が破れるほど精読し（『山科連署記』『蓮如上人御自言』）、『安心決定鈔』を七部も読み破るほど激しく研鑽した（『栄玄記』）。『愚禿鈔』『正像末和讃』『真宗用意』『持名鈔』『最要鈔』『歎徳文』『浄土文類聚鈔』『三経往生文類』『入出二門偈』『願願鈔』『執持鈔』『教行信証名義』『正信偈註』『口伝鈔』『歎異抄』『諸要文集愚要記』『浄土真要鈔』等を熟読したり、書写したりして激しい研究を続けた。貧しい中での刻苦勉励の様は『蓮淳記』に記されている。

二

こうして蓮如は、自ら「かたちをみれば法然、詞をきけば弥陀の直説」（『実悟旧記』）というほどの数百通にものぼる『御文』（御文章）を次々に書いて文書説教を展開したのであった。「御文ハヨミチガヘモアルマジキ」という蓮如の考えは『昔物語記』にも見える。蓮如が真宗興隆に力を示したことについては、実に様々な方法によるのであるが、最大の効果を発揮したのは、文書説教であった。今日、本派で「御文章」、大谷派で「御文」と呼ぶ蓮如の消息文は、今なお盛んに応用される真宗説教の重要なテキストである。蓮如は、寛正元年（一四六〇）六月、四十六歳の時に堅田門徒金森道西の求めに応じて『正信偈大意』を著作し、はじめて消息文数通を製して新しい布教の道を開いた（村上専精著『真宗全史』四一一頁に『大谷家譜』の記事を引いた考証がある）のであるが、御文（以下総て「御文」と記す）を通じて説教を実施する方式を後世の説教者が多用したのはいうまでもないが、既に蓮如自身も生涯これを実

ることが出来る。

蓮如上人仰ラレ候、本尊ハ掛ヤブレ、聖教ハヨミヤブレト対句ニ仰ラレ候（五）

教化スルヒト、マヅ信心ヲヨク決定シテ、ソノウヘニテ、聖教ヲヨミカタラバキクヒトモ信ヲトルベシ（一四）

説教教化に当るものは、まず信心をよく決定してから当らねばならぬ。それでこそ「聞信」は徹底出来ると蓮如は教える。オーソドックスな真宗説教の根本態度がよく示されている。

十月二十八日ノ逮夜ニノタマハク。「正信偈和讃」ヲヨミテ、仏ニモ聖人ニモマイラセントオモフカ、アサマシヤ。他宗ニハツトメヲモシテ廻向スルナリ、御一流ニハ他力信心ヲヨクシレトオボシメシテ、聖人ノ「和讃」ニソノコヽロヲアソバサレタリ。コトニ七高祖ノ御ネンゴロナル御釈ノコヽロヲ「和讃」ニキヽツゲルヤウニアソバサレテ云々（一一）

七月二十日御上洛ニテ、ソノ日仰ラレ候。「五濁悪世ノワレラコソ、金剛ノ信心バカリニテ、ナガク生死ヲステハテヽ、自然ノ浄土ニイタルナレ」コノ次ヲモ御法談アリテ、コノ二首ノ讃ノコヽロヲイヒテキカセントテ、ノボリタリト仰候ナリ、サテ自然ノ浄土ニイタルナリ、ナガク生死ヲヘダテケル。サテ〳〵アラオモシロヤ〳〵ト、クレ〳〵御掟アリケリ（二三）

ここに見られるように、蓮如は、説教に当って繰返し親鸞の和讃を引用している。和讃は説教の上では極めて有効である。特に真宗では親鸞の『三帖和讃』が力を発揮した。親鸞苦心の結晶は、かくして蓮如以後、後世に末永く伝承されることになった。真宗の説教が、中世末期から近世にかけて日本仏教各宗の中で最も盛んで卓越していたのは、偏に宗祖親鸞の苦心の成果が覚如―存覚―蓮如らによって見事に継承敷衍されたことによると私は考える。「サテ〳〵アラオモシロヤ〳〵」は、親鸞の和讃を唱え、蓮如の説教に感銘を覚える聴聞者たちの歓喜を伝えて余りある。説教の理想的な姿というべきであろう。

「世ノナカニアマノコヽロヲステヨカシ妻ウシノツノハサモアラバアレ」ト、コレハ御開山ノ御ウタナリ（二五）

「鳥部野ヲオモヒヤルコソアハレナレユカリノ人ノアトヽオモヘバ」是モ聖人ノ御歌ナリ（二六）

説教の中に必ず和歌を引用して、美声をもって歌いあげる方法は、節談説教の技術的特徴を示すものであり、真宗の説教者の常套であった。蓮如がどの程度の節廻しで親鸞の和歌を詠じたか不明だが、決して棒読みではなく、静かな中にもフィーリングのきいた音声の荘厳があったに違いない。蓮如は聴聞者たちの心の底まで食い込むような説教を実践した。

山科ニテ御法談ノ御座候トキ、アマリニアリガタキ御掟ドモナリトテ、コレヲ忘マウシテハト存ジ、御座敷ヲタチ、御堂ヘ六人ヨリテ談合サフラヘバ面々ニキヽカヘラレ候、ソノウチニ四人ハチガヒサフラフ。大事ノコトニテ候トマウス事ナリ。聞マドヒアルモノナリ（四九）

真宗の説教の特色は、説教者が優れていると同時に聴聞者も優れて

蓮如の説教方式

関山和夫

一

蓮如（一四一五～一四九九）が、本願寺中興の祖といわれる所以は、彼が生涯を浄土真宗の布教伝道に捧げ尽した成果を評価していうのである。蓮如の研究は、既に幾多の学者によって多角的に進められているので、私が今ここで改めて愚考を述べる必要はないのであるが、説教史研究の立場からその方式について考察しておきたいと思う。

『実悟記』に「明応五年十一月の報恩講の二十五日に御法談あり、御伝を御前にあそばされ各難有よし申され候」とあることから、蓮如が『御伝鈔』を拝読して、ありがたく感銘深い説教を実践したことがわかる。この時に蓮如は、恐らく『御伝鈔』に聴聞者の心をゆるがすような静かで感動的な節（抑揚）づけをして拝読したものであろう。この記事は『蓮如上人御一代記聞書』にも見えている。蓮如の説教の根底を貫くものは、親鸞が『教行信証』『一念多念文意』等に述べた「聞法」「聞即信」の精神そのものであった。『山科連署記』（四）に「教行信証、六要鈔、表紙の破れ候ほど御覧候て、其後御文を御作候。これ千の物を百にえり、百の物を十にゑり、十の物を一にゑりすぐりて、凡夫直入の金言を撰み、いかなる者も聞得、やがて信をうるやうにあそばし候」とある如く、信心為本の宗義を旨として生涯を布教に捧げたのであった。

次に真宗法要本『蓮如上人御一代記聞書』の中から、蓮如の説教の真の姿をしのび得る条々を抄出してみたい。

アサノ御ツトメニ「イツヽノ不思議ヲトクナカニ」ヨリ「尽十方ノ無碍光ハ無明ノヤミヲテラシツヽ、一念歓喜スルヒトヲカナラズ滅度ニイタラシム」ト候段ノコヽロヲ御法談ノトキ、「光明遍照十方世界」ノ文ノコヽロト、マタ「月カゲノイタラヌサトハナケレドモ、ナガムルヒトノコヽロニゾスム」トアルウタヲヒキヨセ御法談候、ナカナカアリガタサマウスバカリナク候フ、上様御立ノ御アトニテ、北殿様ノ仰ニ、夜前ノ御法談今夜ノ御法談トヲヒキアハセテ仰候。アリガタサ〳〵、是非ニオヨバズト御掟候ヒテ、御落涙ノ御コトカギリナキ御コトニ候」（二）

この一文により「光明遍照十方世界念仏衆生摂取不捨」をテーマにした法然・親鸞の浄土教を説く蓮如の感動的な説教の一端を窺知す